

## 占領下・戦後の演劇運動

本誌は「文学・映画・演劇・文化運動研究誌」を謳っており、文学だけでなく表象文化を広く扱う研究誌である。演劇についてもこれまで諸論考を掲載してきた。この度刊行する第八号の特集は、「占領下・戦後の演劇運動」と題し、一九四〇年代から一九五〇年代にかけての演劇をめぐる状況に光を当てる。

同時期の演劇史を繙くと、プロレタリア演劇運動や築地小劇場の退潮後、新協劇団や新築地劇団などによってリアリズム演劇が盛んになるものの、国威発揚を目的とした移動演劇によって進歩的演劇は影を潜め、戦後はその反省の上に立った新劇運動が展開された後に、三島由紀夫や安部公房のような新世代の劇作家が輩出されたとされている<sup>\*</sup>。こうした演劇史の記述を個別に検討することで、より詳細な同時期の状況を明らかにするのが、本特集の狙いである。

近年の社会状況に対する反応として、演劇雑誌では戦争と関連した特集が組まれている。たとえば、『悲劇喜劇』二〇一五年七月号では「演劇と戦争 いま思うこと」が、『テアトロ——総合演劇雑誌——』二〇一九年八月号では「戦争と演劇人」などがある。これらの特集の中には、過去の演劇を論じた記事も散見される。一方で、近年の文学研究誌では、演劇に関する特集はあるものの、占領下・戦後の時期の特集はそれほど多く確認されない。占領下・戦後は演劇運動の目的や方針が変質し、戯曲を観たり演じたりすることの意義が多く語られた時期である。歴史の影に隠れた演劇運動や戯曲作品は多く残されているはずだ。

また、歴史の影に隠れた演劇運動や戯曲作品と、演劇史上明らかにされている事象との関連性を論じる必要もあるだろう。戦前期の動向が占領下の演劇運動とどのように関連しているのか。占領下の動向が戦後の戯曲創作にどのように連絡しているのか。リアリズム演劇、国民演劇、戦後の新劇運動といった区分を俯瞰し、共通する要素や影響関係、関連性などを踏まえて演劇史を見直すことも、本特集の目的である。

それでは以下、各論の概要を確認しよう。

天野知幸「国鉄労働組合機関誌における自立演劇言説の考察——GHQ／SCAP検閲の影響を踏まえて」は、占領下において広がりを見せた職場演劇、いわゆる自立演劇を取り上げ、国鉄労働組合関連誌において、怠業の一種である「職場離脱」が検閲の対象になったことに着目する。その上で、同労働組合関連誌に掲載された「七〇五列車定時」という戯曲の内容を分析し、怠業回避の筋によってGHQ／SCAPの意向に添いつつも、その際の職員たちの心理的葛藤を抵抗として位置づける。占領下は職場や学校などでアマチュア演劇が盛んになった時期であるが、そうした時期の権力と演劇運動との関係性を明らかにした論考である。

岩本知恵「雄弁な「沈黙」——植民地主義批判としての安部公房「友達」論」は、安部のリテラリー・アダプテーションの代表作である「友達」を取り上げ、家族の描かれ方に着目する。自身の家を占拠されつつも、占拠している家族のうちの女性に家事労働を負担させる主人公の設定を、作品の批判的形象であると位置づける。安部は年譜や自作を書き換えつつ、その一部を消去してきたことは、近年の研究において注目が集まっているが、そうした作者の活動を単なる脱政治化ではなく、人々の生活の次元に浸潤する植民地主義の批判を目指したものとして見直す論考である。

加藤大生「歴史を爆砕し、裂開する戯曲——花田清輝「爆裂弾記」をめぐる——」は、大阪事件の風刺や戯画化として評価されることの多かった戯曲「爆裂弾記」を取り上げ、同作の余剰とも言える諸要素に着目する。同作では明治期の流行歌が多数引用されていたり、景山英子（のち福田英子）をモデルにした「女壮士」に独自の形象が与えられていたりする。一見余剰のようにも思えるこうした諸要素を盛り込むことで、花田は衝突しつつ集団化していくプロットを形象している。同時期の演劇に関する論争の整理や成立過程の解明、作者の演劇論理解を確かな土台としつつ、戦後戯曲の読み直しを図る論考である。

なお、本号に掲載する論考は三編であるが、本誌にこれまで掲載してきた占領下・戦後の演劇運動をめぐる論考も、

本特集と問題意識を共有している。村田裕和「歴史の裂け目を縫うように 貴司山治「雷新田」論」(第二号)では転向したプロレタリア作家の貴司山治の戯曲を分析しており、藤原崇雅「「ドモ又」の共済——戦後上海における日本人居留民の演劇活動——」(第六号)では、上海における居留民演劇の実態を明らかにしている。また、占領下・戦後より以前の時期の戯曲を対象とした論考として、坂本彩香「異和の体 岸田國士「牛山ホテル」論」(創刊号)も掲載している。本号掲載の諸論考とあわせて、読んでくだされば幸いである。

\*一九四〇年代から一九五〇年代にかけての演劇史の記述にあたっては、林廣親「近現代演劇史早分かり 上・下」(『戯曲を読む術——戯曲・演劇史論』笠間書院、二〇一六)や、西堂行人「リアリズム演劇——久保菜と三好十郎」「戦争と演劇」「戦後演劇——木下順二と千田是也」(『日本演劇思想史講義』論創社、二〇二〇)を参照した。

(藤原崇雅)